

イラン南東部地震救援

国際医療救援部 部長 槇島 敏治

派遣地域:イラン南東部

派遣期間:2003年12月～2004年1月

2003年12月26日午前5時26分(日本時間12月26日午前10時56分)バム市近郊を震央とし、震源の深さ6km、震度6.5(Richter scale)の直下型地震がイラン南東部のケルマン州のバム市とその周辺の村々を襲いました。この地震の被害はバム市を中心とした半径16kmの比較的狭い地域に限られていたにもかかわらず多大な被害をもたらしました。死者42,000人、負傷者30,000人を超え、建物の全・半壊25,000棟、総被災者数200,000人を数え、また避難者数は75,000人でそのうち20,000人は親戚宅に避難しており、入院者数は10,000人にのぼり、両親を失った児童は1,800人、片親を失った児童は5,000人にのぼりました。医療施設の被害は施設の40～100%に及び、3つのDistrict Hospital(総病床数:255)は壊滅しました。

日本赤十字社は派遣を決定し、当院より医師2人(槇島敏治、丸山嘉一)、看護師1人(大矢和輝)、技術要員1人(堀口孝春)の計4人が先発隊として平成15年12月27日に出動し、ERU初動チームは翌28日に出発し、29日、テヘランで合流した後、同日バムに到着しました。診療は現地人医師と通訳(一部日本語通訳)の協力を得ながら行い、12月31日から1月21日までの実質18日間で1367名、1日平均76名の診療を行いました。1月18日半数の隊員を帰国させるとともに、19日新たな隊員を迎え、そして、1月22日チームリーダーと残りの隊員がバムを発ち、1月25日帰国しました。

バムは砂漠の中の古いオアシスの町で、380万本ものナツメヤシが栽培されています。ナツメヤシの実(デーツ)といい、その名のとおり棗(ナツメ)と形も大きさも似ていて、その味は干し柿に似て甘く、乾燥地域での重要なカロリー源となっています。この町の伝統的な家は土を水で練って乾かした日干しレンガを積み重ねてできています。

2003年12月26日、イランの南東部のこの町を襲った震度6.5の地震はこうした家々を破壊しました。特に早朝就寝中に起こったため多くの人々が生き埋めになってしまい、バム市の赤新月社支部の7名の職員のうち4人が亡くなられたといえます。死者の総数は4万2千人、負傷者は3万人で、建物の85%が倒壊しました。日本赤十字社は翌12月27日に先発隊として私と丸山嘉一副部長を、そして28日にはERU(緊急対応ユニット)チームの一員として大矢孝輝看護師と堀口孝春技術員を派遣しました。テヘランで合流した両隊は29日深夜に被災地のバムに到着しました。

市内のナツメヤシの果樹園にキャンプを設置し、12月31日には仮設の診療所で被災者の方々の診療を開始しました。連日100人を超す患者さんが受診されましたが、その15%が地震で怪我をされた方で、残りの多くは風邪や肺炎などの呼吸器疾患の患者さんでした。また、地震によるストレス症状を訴える方も多く見られました。現地の患者さんを診療するには通訳が必要ですが、最初はイラン赤新月社のボランティアで英語の話せる人に頼んできてもらっていましたが、後半はイランに帰化された日本人の女性やそのお友達で日本語が話せる方々に助けをいただきました。他の赤十字社のチームが通訳の確保に苦労している中、われわれ日赤チームは本当

に恵まれていました。

バムは昼間暖かいのですが、夜間は気温が零下にまで下がるのでまさにサバイバルでした。その中で、丸山先生は新しい能力に目覚めたらしく、焼き網や旗竿など様々なものをどこかから拾ってきてくれました。大矢看護師も手術室勤務とは異なった慣れない環境なのに、初めての国際救援活動とは思えない活躍を見せてくれました。また堀口氏は国内の救護の応用で我々の生活を支えてくれました。特にチームのメイン・シェフとして、二百キロも離れた町まで食料の買出しに行ってくれ、その腕を振るってくれました。チームの皆のおかげで、私も2004年1月24日、4週間の活動を終えて無事に帰国し、チームリーダーとしての重責を果たすことができました。





イランの人々に医療の手を

医師 丸山 嘉一

派遣地域:イラン南東部

派遣期間:2003年12月～2004年1月

それは突然に

平成15年12月26日、仕事納めを兼ねた医局会の途中、イラン地震の一報を耳にしました。板東副院長とM6.3ぐらいなら大事には至らないだろうと話していたことを覚えています。帰宅後、時々刻々と死者の増える報道を見ていたとき電話が鳴りました。「榎島だけど、先遣隊でイランに行くことになった。一緒に。」板東副院長、磯山外科部長に連絡をとると、「気をつけて、後は任せて！」の言葉にほっと安心しました。残していく患者さんが気掛かりでした。深夜、小雪の舞う中を日赤本社にパスポート、ビザ用の写真を届けに行くと、本社の方々も寝ずの体制で現地の情報収集、器材の手配に追われていました。

27日に榎島部長、本社の大山さんとともに出国、首都テヘランでイラン赤新月社と調整後、1日遅れで出発した本隊11名と合流しました。12月29日夜、被災地バムに入りました。バム空港はまるで戦場さながらでした。次々と離着陸する軍用機の轟音の中、サーチライトが砂埃を舞いあげる強風にはためくイラン赤新月社旗を照らし出していました。市内に明かりはなく、車のヘッドライトにテントと崩れ落ちた家々が次々と浮かび上がって来ました。ようやく借り物のテント(パオのようなもの)を設営し、寒さに凍えながら眠りについたのは午前3時近くでした。

翌30日の朝バム市内中心に入りました。なんと表現すればよいのでしょうか。広島原爆記念館で見た爆心地の町並みに似た光景が展開されていました。建物はなく、煉瓦と泥の山にニョキニョキ鉄筋が生えていました。そんな光景に圧倒されていた中、一緒に現地入りしたイラン赤新月社のボランティアの一人の流していた涙が印象的でした。我々はイラン赤新月社危機管理センター近くのナツメヤシ園をキャンプ地としました。

拾い物、借り物、貰い物生活

赤十字では、大規模な災害に迅速に対応できるよう、あらかじめ緊急出動可能な専門家チームを編成し、必要な資器材を配備しています。機材と要員の両輪で成り立っているユニットをERU(緊急対応ユニット)と呼びます。災害発生時には、国際赤十字の調整のもと、48時間以内に被災地のニーズに応じたERUが出動する体制となっています。日本赤十字社のERUは診療所型ERUといわれ、一次医療機関に相当します。診療だけでなく、基礎保健医療サービスを提供することができます。特に、悪化した環境下での伝染病蔓延の予防、母子保健、教育を通じた地域保健の改善といった活動を担います。総重量7トンに及ぶ器材の中には1万人の被災者を対象に3ヶ月は活動可能な医療資器材、テント、給水排水施設や、被災地で自己完結の救援を行えるよう我々の生活物

資がまとめられています。

ところがオスロを出発し、イランに届くはずの器材が来ません。診療所はおろか、自分たちの食住にも困る有様でした。そんな中、榎島チームリーダーを初めとして、我々は何のためにこの地を訪れたのか、今すべきことは何かという点では全員一致していました。イラン赤新月社からはテント、食料、水を供給してもらい、崩れた瓦礫の中から見えそうな物を拾って来て仮設救護所を設営しました。医薬品は日本から携行したスーツケース3箱の医療セットを使い、12月31日午後2時30分診療を開始しました。平成16年1月5日ERUでの診療が始まるまで仮設診療・キャンプ生活が続きました。

ERU機材到着までは診療、生活ともに困難を極めました。限られた資機材の中で、初の国際救援であった大矢看護師は存分にその才能を発揮していました。トイレも不十分、勿論風呂はありません。寒さに凍える中、せめて食べるものはと堀口技術員は八面六臂の大活躍でした。食料、日用品の買い出しを往復6時間かけて行い、日本から携行した食材を駆使した料理にスタッフ一同活力を取り戻しました。

瓦礫からの生還、心のキズ

診療開始日、地震発生後6日目に助け出された男性が診療所に運び込まれました。坐骨骨折、坐骨神経麻痺と診断し点滴後、イラン赤新月社手配の飛行機で搬送されました。日本でも紹介されましたが9日目には97歳の老女が瓦礫から救助されました。診察しますと外傷はなく、比較のお元気で、やや興奮されておりました。生還できたのは毛布にくるまり寒さを凌げたことと、朝食食べるための食料、水を枕元に置いておくという用心深さの賜であったそうです。

救援時の診療で極めて重要なのは、通訳の存在です。今回、45年前日本人女性で初めてイランに帰化された山村さんのお陰で日本語・ペルシャ語の通訳が可能でした。地震関連の外傷患者は減少し、呼吸器疾患、慢性疾患患者が増加していく中、通訳を介して十分に話を聞きますと、ほとんどの方が心的ストレスを感じ、身体症状も伴っておられました。そのため、女性を対象としたところのケアを目的とする「コーランを読む会」が行われるようになりました。コーランを拠り所とし、女性だけで行うこの会はイスラム社会に根ざした新たな取り組みとして、国際赤十字赤新月社連盟からも注目されています。

1日平均100人の患者を診療し、処方した薬剤は鎮痛剤、湿布薬、睡眠薬、胃薬が多かったようです。薬がないと安心して帰らない傾向は日本と同様です。外傷患者は当初7割に達しましたが、最終的には15～20%にとどまり、内科系の患者が残りを占めました。

イラン赤新月社・ボランティア

イラン赤新月社は発災直後から精力的に救助活動を展開しました。イラン赤新月社の機動力は職員7000人もさることながら、登録ボランティア220万人に象徴されます。人的・物的資源は豊富で、今回の救助活動でも遺憾なくその実力を発揮していました。彼らは我々日本赤十字社に対しても実に親切に対応してくれました。診療所設営・維持のためのボランティアの派遣、水、テント、毛布、食料、薬品類と多岐にわたる援助を受けました。イラン赤新月社ボランティアは行動力、責任感ともにしっかりしており、我々のために骨身を惜しまず援助してくれました。勿論、彼らも心的ストレスを感じていて、様々な主訴で日赤の診療所を訪れるスタッフも大勢いました。瓦礫の街を見て涙した彼や、遺体の収容・埋葬の中で受けたトラウマで手の震えが止まらない、夜眠れないと話していた彼らは今どうしているのでしょうか。

そして救援は続く

1月12日帰国すると、イラン地震はすでに過去の出来事でした。自衛隊のイラク派兵と重なり、「イラクは大変でしたでしょう」と声をかけられることもありましたが、NGOの中にも早々に撤収する団体も多くあります。確かに緊急救助は終わったかもしれませんが、しかし、国際赤十字赤新月社連盟、国連を中心とする救援はまだ続いていますし、日本赤十字社も現地活動は終息するまで続きます。そして医療センターからは、第2班に山本看護係長、第3班に大和田看護師長、第4班で菊地医師などが派遣されました。

バム市の人口9万人、周辺の村を含めても11万人の内、4万人が死亡するということはどういうことなのでしょう。復興に携わる現地のスタッフが政治・社会・医療・教育すべての領域で不足していることを意味しています。現地産業の中心であったナツメヤシの果実園の維持は、地震での用水路(カナート)の崩壊により危惧されています。重要な観光資源であったアルゲ・バム遺跡も崩れ落ちてしまいました。

日本赤十字社は医療救援のみならず、基礎保健(給排水、母子保健など)の援助も併せて行っています。イランの、バムの人々が自立して運営することができる日まで我々の救援は続きます。

